

(学級掲示)



9

がんから命の大切さを学ぶ教室を実施します！



月は、小児がんへの理解を深め、小児がんの子どもたちに明るい光をあてることを目的に、「小児がん啓発月間」とされています。小児がん支援のシンボルカラーは「ゴールド」で、①子どもたちは「金」のように貴重な宝物であること、②小児がんに向き合っている子どもたちに「輝かしい光を」という意味が込められています。

9月8日(日)の東奥日報に、弘前城がゴールドにライトアップされたことと、県小児がん支援団体の「ともしびプラス」さんの記事が紹介されていました。代表の米田さんは、9月末に本校で行う「がんから命の大切さを学ぶ教室」の講師であり、当日、「小児がんの闘病生活〜わが子の死と向き合って〜」というテーマでお話いただきます。ぜひ、みなさんには、①小児がんについての正しい知識を身につけ ②がんに向き合う人々の気持ちを理解し、自分のそして周りの人の命や心を大切にしたいと思っています。

小児がんを理解と協力を

弘前城 啓発ライトアップ

小児がん啓発キャンペーンの一環として、弘前大学医学部付属病院小児科と日本小児がん研究グループは7日夜、弘前市の弘前城をシンボルカラーの金色にライトアップした。9日まで行われる。

ライトアップは、闘病中の子どもやその家族へのサポートの意思を表明するため毎年9月、全国で実施。医療や研究に「光を照らす」との意味合いもある。今年も国内17カ所の名所などがライトアップされる予定。

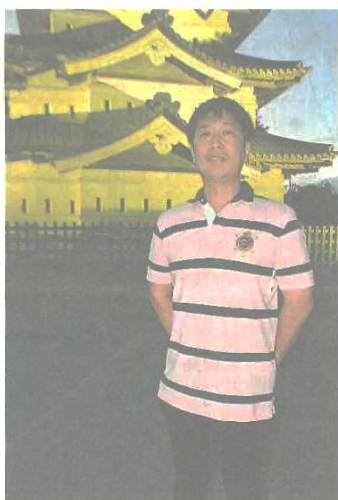
弘前公園でのイベントは今年で3回目。午後6時過ぎ、患者の家族や医療関係者ら約50人が集まり、金色に染まった弘前城が夜空に浮き上がると、記念撮影をするなどしていた。ライト

「安心し暮らせる社会に」

ともしび代表・米田さん(八戸)

7日の弘前城ライトアップイベントには、県小児がん支援団体「ともしびプラス」代表の米田親弘さん(38)「八戸市」も参加した。米田さんの長女は血液のがんを患った経験がある。米田さんは「多くの人に小児がんについて理解を

深めてほしい」と語った。米田さんの娘は、2019年5月、生後4カ月の時に「骨髄性白血病」と診断された。県内で唯一、子どもの白血病に対応できる弘大病院に7カ月ほど入院。今は経過観察のため定期的に通院している。



「病氣と闘っている子どもや家族の不安を少しでも和らげたい」と語る米田さん

診断された当時、米田さんは「娘の命はどうなるのか。治療の流れがどうなるか。治療費はどれくらいか」と強い不安と戸惑いを感じたという。その経験を踏まえ2020年に「ともしび」を立ち上げた。小児がんの子の親など約20人が中心メンバー

アップは午後9時まで。同小児科の照井君典教授は「以前に比べ、小児がんに対する理解が深まっているが、子どもの療養環境は十分とは言えない。皆さんの一層の理解と協力が必須」と話した。

県小児がん等がん調査事業(18歳未満対象)報告によると、2011〜20年の10年間の県内の小児がんの患者は189人(年平均18.9人)。がんの種類は白血病、脳腫瘍、リンパ腫などとなっている。(菊合賢)

となり、医療機関などとも連携し、シンポジウムや講演会などを開催。「病氣と闘っている子どもや家族の不安を少しでも和らげたい」と、妻の百恵さんとともに、発症から退院まで何が起き、どんな予期せぬことが起こったのかなど、自分たちの経験を語っている。小児がんは、子どもが成長してから合併症が出る可能性があり、本人や保護者の不安が常につきまとう。5歳となった米田さんの長女の体調は安定しているが、いづどんな体の不調が現れるのか分からない。米田さんは「がんに関心した子どもが、社会で安心して暮らせるように、医療や教育現場での支援をお願いしたい」と話した。(菊合賢)